

喫煙者が全身麻酔下に手術をうけると、合併症が高頻度に発生します。少なくとも手術前1ヶ月は禁煙が必要です。

1. 麻酔と喫煙

- 喫煙者では肺や気管からの分泌物が多いため、全身麻酔下に手術を受けると、合併症を併発しやすくなります。麻酔中はほとんどの患者が人工呼吸を必要としますが、この間は自力での喀痰排泄は困難で、気道末梢が閉塞するために血液の酸素化が悪くなります。麻酔中の酸素ガス分圧は、喫煙本数と年数に依存して悪化し、手術後の低酸素症と合併症の発生の重要な因子です。酸素化が悪いと手術創の治癒も遅れます。
- 喫煙者では肺の免疫系の能力も低下しており、肺合併症を増す危険性が高くなります。禁煙期間は手術前1ヶ月は必要ですが、このことを考えると6ヶ月以上が理想です。しかし6ヶ月前から手術を計画することは稀なので、日頃から禁煙することが重要です。

2. 麻酔と喫煙（心臓血管障害の危険性）

喫煙は手術中や手術後の肺の合併症を増加させるばかりでなく、心臓や血管にも悪い影響があり手術や麻酔の危険性を高めます。長期の喫煙により血管の内側が障害を受けて狭くなったり、血栓が血管の壁にできやすくなっています。一方、たばこの煙の中に含まれる一酸化炭素は酸素を運搬する赤血球中のヘモグロビンにくっついて離れないため一部のヘモグロビンは酸素を運搬する能力を欠くようになります。それを補うようにしばしば喫煙者では赤血球の数が増えて血液が濃く粘っています。

さらに喫煙により血液の凝固系と線溶系のバランスが崩れ血栓をつくりやすくなっています。手術中や術後に心臓の血管に血栓ができると心筋梗塞が起こります。また脳血管に血栓が詰まると脳梗塞になります。その他静脈にできた血栓が肺血管に詰まると肺梗塞を起こします。このため喫煙者は手術に際して心臓や血管の重い合併症の危険性が高いのです。